

鹿島神宮「常陸帯祭」について

常陸帯祭は鹿島神宮の新春の祭典として行われています。明治以前まで行われていた常陸帯祭を現代風に改変しておりますが、本質としては鹿島神宮のご神徳とご神宝である常陸帯のご加護にあやかり「男女の縁」を結ぶ神事でございます。

これまでにはこの祭典を契機に交際に至り、めでたく鹿島神宮で神前挙式を挙げた事例もございました。皆様にも広く豊かなご神徳が広まっていくことを心よりお祈り致します。

常陸帯祭の当日について

午後3時半より受付開始。新庁舎の受付でお渡しする帯に名前を記入していただきます。その後、午後4時の時刻に合わせて神職と参加者が拝殿での祭典に参列いたします。祭典では事前に名前を記入した帯が裃い清められてご神前に捧げられ、宮司により祝詞が奏上されると名前が記された帯は神前より下げられて「神縁の帯結び」が神職により行われます。

祭典がおわると拝殿から祈祷殿和室に会場を移し、それぞれ結び付けられた帯が順に読み上げられます。これにより二人一組になった男女は自己紹介などを経て鹿島神宮からのお題に挑んでいただきます。例年、二人で協力をして一首の短歌を作成していただき、この短歌はのちに献歌帳に書き写され、改めて鹿島神宮の神前に献歌されます。(毎年、短歌の「お題」と和歌を詠むための手引きを用意しております。)

すべての神事と行事の終了後には小宴が開かれ、参加者の皆様には今回のご縁をさらに良きものとなるよう懇親を深めていただいております。



氏名記入の帯



常陸帯祭拝殿の様子



結ばれた神縁の帯



ご神縁の発表と和歌の作成



「常陸帯」とは

常陸帯とは今から約 1800 年前の仲哀天皇の後である神功皇后の腹帯を鹿島神宮に進納したものと伝わり、現在も殿外不出の神宝として本殿に祀られています。この帯はのちの応神天皇となる皇子を身籠ったときの腹帯であることから、現在も鹿島神宮の安産信仰の拠り所となっております。

平安時代になると常陸帯は妊娠や出産といった安産信仰はもとより、その前の事象である恋愛や婚姻をも成就させるご神徳がある考えられました。新古今和歌集にも「あづま路の 道の果てなる 常陸帯の かごとばかりも 逢ひ見てしがな」と、常陸帯の加護によりあの人に一目でも会いたいものだという異性への慕情が歌われています。

かつて鹿島神宮で行われていた常陸帯神事は正月に若者が集い神事が行われ、男たちは帯に和歌を書き神前に供え、女たちはそれを選び詠んだ女を妻に迎えるというものでした。また別の時代の古文書には二つの帯の先端に男女の和歌と名を記し、神職がその先を結び合わせて結婚の相手を占ったともあります。

まさに帯と和歌を通じご神意に預かるというもので、鹿島の神の広く豊かなご神徳を今に伝える故事であるということができているのではないのでしょうか。

申込み・問合せ

参加希望者には①～⑧の内容をお伺いしております。

- ①氏名 ②性別
- ③年齢 ④生年月日
- ⑤住所 ⑥電話番号
- ⑦Email ⑧ご職業

お電話またはQRコードからお申込みください。なお定員に達し次第締切とさせていただきます。



0299-82-1209 (中嶋・佐藤)